

初級者のSALC利用：教養教育との連携

SALC for Beginners:

Establishing Links with Liberal Arts Classes

多田 恵実*

Megumi TADA

要 旨

弘前大学イングリッシュ・ラウンジ（以下、EL）は本学学生の英語能力を実地の英会話練習やセミナー・クラスにより涵養するための自主語学学習施設Self-Access Language-learning Center（以下、SALC）である。教養教育英語の初級レベルのクラス担当である筆者は、学生の英語能力を上げるため、教養教育英語とSALCの連携を図ってきた。本稿は2017年後期から2019年前期までは日本料理紹介のインターナショナル・クッキング・プレゼンテーション、感染対策で対面授業ができない時期にあっては、インターナショナル・プレゼンテーションとして、それぞれ留学生を含んだ実地の英語使用場面をファシリテーションすることで、初級レベルの学生の動機づけを行う試みを紹介する。匿名性の気易さや、テキストメッセージなど日頃の使いやすいテクノロジーが初級学生の積極性をバックアップしている面がある。

キーワード：SALC、遠隔授業、英語初級者

Self-Access Language-learning Center (SALC) と遠隔授業

弘前大学は本学学生の英語能力の伸長を目的に、SALCとして2012年にELを設立し（Birdsell, 2015）留学生ELサポーターとの自由な英会話の練習や、本の貸出、DVDやソフトウェアの利用、またセミナーと呼ばれる英語教員の指導による、自由に学生が参加することのできるトピック別、各60分の英語で行う内容言語統合型授業が、各週18コマずつ、2020年11月現在も開講されている。

2020年春、全世界はコロナ禍に見舞われ、多くの大学で感染症対策として新学期に緊急的に始められた遠隔授業だったが、これまで対面で年間延べ約6,000人ずつの利用者があったELもやむを得ず、対面授業式のセミナーを遠隔授業に切り替えて行うことになった。

これまでのセミナーは予約なしで自由にクラスに入ってきていた学生が、メディア授業の開始と共に、ウェブ上の予約サイトが設置され、授業予約をして入るという新形式が出来上がり、その利用者数は、オンライン上にもかかわらず2020年5月11日からのオンライン・セミナーの利用者数は延べ1,545人（2020年5月11日から8月6日、および10月20日から25日の期間）となり、10月26日以降の対面式の来室者とを合わせると、2020年度後期途中ではあるが、延べ1,782人（2020年11月6日現在）となった。

オンライン授業は顔が見えない、直接のやり取りができない等のデメリットもあるが、初級レベル学習者にはメリットでもある。実際の学生のアンケート上のコメントにもあるのだが、オンライン授業は

* 弘前大学 教育推進機構 教養教育開発実践センター

Center for Liberal Arts Development and Practices, Institute for the Promotion of Higher Education, Hirosaki University

聞いているだけでも参加できる、それほど英語を話さなくてもいけないという強迫観念を感じなくてもよい、など学生にとっては利点として認識できる面がある。

インターナショナル・クッキング・プレゼンテーションの初級学生の参加

ELでは教養教育英語クラスの内容とSALCをつなぐ目的で、2017年後期から2019年前期まで、4学期にわたり教養教育の英語クラスの学生が「インターナショナル・クッキング・プレゼンテーション」という催しを行ってきた。教養教育開発実践センターでイングリッシュ・ラウンジ・センター長のシャーリー・バーマンの発案によるもので、その詳細は以前に報告したが（Berman & Tada, 2019, 2018a, 2018b, 2018c）、要約すると留学生を含む聴衆に対し3～5名のグループから成る学生が、簡単な日本料理をテーマに、材料や料理の起源、文化的背景、どのような他の料理法があるか、などさまざまな学生独自の切り口で5～10分ほどのプレゼンテーションを行い、さらに5～10分ほどで実際に料理をして、観客には試食してもらい、感想を聞き、プレゼンテーションに対する質問やその他の事柄について、それらすべての受け答えを英語で行うというものである。

学生に対する足場架け（Scaffolding）のポイントとして、いくつか挙げると1) 発表スライドのテンプレートを与え、2) イントロダクションのスピーチ原稿は定型フォーマットを与えて、各グループがそれに当てはめることでスピーチを始めることができるようにし、3) 1枚のスライドに関するスピーチを20秒間に限定し、スライド1枚ごとに話者を交代することで、心理的負担を減らし、4) その食べ物や料理に関する、個人的な思い出や逸話について自由に語ることのできる、1分間スピーチのタスクを設け、5) スピーチ原稿の添削は教員が行うだけでなく、ELサポーターの添削を受けてもよいこととした。英語添削は時間がかかることが多いので、教員だけでなくEL全体でバックアップできたことは、そしてまた、英語でELサポーターに添削を頼み、内容を自ら説明することでターゲット言語を使用する機会にもなり、これもまたそれ自体が学生にとって学習の機会となっている。

バーマンの上級クラスに対して、筆者のクラスは初級レベルのクラスであり、本学教養教育英語51クラスのうち、49～51番目の最下のクラスである。VELCテストでは330～446というスコアで、VELCテストの説明書によれば、TOEICに換算すると225から395というスコアの学習者のクラスである。

この初級クラスの学生がELを利用し、英語のプレゼンテーションを実際に母語話者（L1）や第二言語話者（L2）の英語話者に対して行った。そのアンケート調査に答えた学生たちの意見によれば、このような活動がとても効果がある、あるいは効果がある、と答えた者たちの割合がそれぞれ、2017年後期から2019年前期までの4学期間で52%、59%、85%、78%に上った（Tada, 2020）。

各学期末に行ったクッキングプレゼンテーションに関するアンケートからいくつかのコメントを紹介すると、肯定的なものとしては、「英語で発表ができた」「自分の担当をしっかりと説明できたことがよかった」「ポジティブに自分の意見を伝えることができた」「メモを見ず、人の目を見て話せた」「パワーポイントを使った発表ができた」「焼きおにぎりやその他の料理についてジェスチャーを、アイコンタクトを使いながら説明することができた」「チームで協力し役割分担ができた」「互いに励まし合った」「即興で話すことができた」などがあげられる。逆に課題としてあげられたのは「パワーポイントを作るのが難しかった」「チームのメンバーのやる気がなく一人でやる部分が多かった」「打ち合わせをしっかりと行ったうえでやるべきだった」「十分な練習時間が取れなかったがベストを尽くした」「間違った発音を直したい」「質問が理解できなかった」など、初級レベルならではの困難さがあげられた。一方で、「英語の授業でしたが、料理やプレゼンなど学生をより成長させる豊富な内容で楽しかった」「他の班ののを見たり、試食したりするのが楽しかった」「最初は面倒だったが、本番は楽しかった」「発表をするのが楽しく、新しい言葉を覚え、発表のスキルを学んだ」「このプロジェクトを継続してほしい」など、難しさの中にも楽しんだ様子がうかがえる。

このような実際の経験を踏まえたアクティブラーニングにより、初級レベルのクラスでも十分に遂行でき、英語に関して自信がない、あるいはネガティブな経験しかない学生たちでも、自分の言ったことがわかってもらえた、日本料理など自分がよく知っていることを当事者意識（ownership）を持って説明できることの喜びが、学習意欲を盛り立てるのではないかと推測される。

こののち、留学生の中から志願してもらい、自分たちの国の料理をしながらプレゼンテーションを行い、さらに話し合いを進める企画を毎年立てたのだが、3年目に入るところで、コロナ禍にあい、今現在この活動は休止中である。

遠隔でつなぐインターナショナル・プレゼンテーション

学生を Student Assistant（以下、SA）として授業に参画させることは、学生の学習計画、授業運営、評価に対する当事者意識（ownership）を高め、学習者同士の教育的変容の可能性を刺激する（Owen, 2011）。先に EL で行われた留学生による SA 活動である、EL サポーターの制度は、このコロナ禍にあってもオンラインで続けている。

2020年前期に EL で行われた筆者担当の EL 遠隔サイトで行われたプレゼンテーション・イベントはそのような活動の一環で、いずれも Teams 上で遠隔で執り行われた。5回目だけは例外で、シンガポール国立大学で教鞭をとる方に講演をお願いした。

2020年前期および後期は、コロナ感染症防止対策として英語の客観テスト（本学では VELC テスト）が一年生に対して行われなかったため、学生の英語能力に関して明確な数字の指標はなく、初級者としている学生はセンター試験でクラスが分けられた。

各プレゼンテーションの概要

5回にわたり行われた発表のプレゼンターは5人全員が第二言語として英語を話す L2 話者で、L1 話者ではないものの日常生活で英語を使用しており、CEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠）で言えば C2 レベルの「母語話者と遜色のない熟練者」にあたる。ここでのすべての発表は英語で行われた。

留学生プレゼンターは勉学の傍ら、EL で EL サポーターとして活躍している。すべての発表はオンラインの Teams を使って行われ、発表者に直に質問をすることもできるし、テキストメッセージで投稿欄に書き込むこともできる。直に顔を表さない匿名性の気易さや、テキストメッセージなど日頃の使いやすいテクノロジーが初級学生の積極性をバックアップしている面があった。

概要である性質上、発表中の詳細とデータは割愛する。

Amazing! Kenya すばらしいケニア

本学に教員研修留学生として留学中でケニア出身のムワンギ・ジェームズ・ムブグアによる発表は、アートの教員である彼の背景を生かして、数々の美しいケニアの写真に彩られていた。ケニアはウガンダ、タンザニア、ルワンダ、ブルンディ等のある東アフリカに位置し、ケニアの国名はケニアで最も高い山、キリンヤガから来ており、キクユ語で「ダチョウと共に」の意味であること、ナクルというジェームズの故郷はフラミンゴと白サイ・黒サイで有名で、マサイマラ国立自然公園では国をまたいでタンザニアからケニアまで毎年8月に動物の大移動があること、マサイ族は多くの長距離ランナーを輩出しているが、その文化は独特で世界的に有名であること、49部族に分かれているが、公用語はスワヒリ語（および英語）でコミュニケーションは容易であること、その一方で各学校は各部族の文化を大切に、毎年お祭りを各学校が開くこと、子供たちはいつも学校に歩いて通っている等、多方面の話題を

写真とともに堪能させられた発表だった。英語は彼にとっての第二言語であることを学生たちが認識し自らのロールモデルとすることができたと考ええる。

参加者計36名のうち、初級クラスからは20名の参加で（55.56%）であり、Teams上の英語によるコメント数は21回、語学だけでなく写真が理解を助けたのではないかと考えられる。

Education in Panama パナマの学校教育

パナマから同じく教員研修留学生として本学に留学中のアルマンザ・メンドーサ・ミゲル・アンヘルが、基本的なパナマに関する知識とその教育システムについて話した。西にコスタリカ、東南にコロンビアの位置にあり、北のカリブ海と南の太平洋という地の利を生かしたパナマ運河は歴史的にも有名だが、人口は約400万、その半分は首都パナマ市在住という。美しくダイナミックな自然に囲まれたパナマは、運河建設にその昔日本人技師も関わった。多様な人種と文化を象徴する鮮やかな色彩の民族衣装が目を引き。各学齢はほぼ日本と同じ年齢で小中高校、その後の大学あるいは職業学校へと続く。私立は学費が高く、公立校は屋根だけで壁のないしつらえの学校もある。小中高を通じて制服があり、文化・サークル活動は盛んである。ミゲルは教員として柔道を公立学校に導入し、そのクラブ活動を担当し、日本やヨーロッパを含む世界各地を柔道交流で回った。音楽家でもある彼はトランペットやピアノを演奏し、音楽サークルやスクールバンドを監修する。本学では日本の尺八を習っている。

参加者53人のうちの、初級者レベルクラスからは30人（56.60%）が参加し、英語のコメント数は40回だった。ミゲルにお礼の手紙を書くというプロジェクトも事後に行い、参加者のうち10人が日本語、英語の両方で感謝の手紙をメールで書いた。日本語を学習中のミゲルのために日本語もOKとしたこともあり、初級レベルの学生が書き易かったようで、参加した10通中、6通が初級者クラスの学生からだった。中には英語、日本語、スペイン語と3カ国語で書いた初級の留学生もあった。それぞれ実名は割愛し、S1, S2, S3としてここに引用する（原文のまま）。

S1: Hello! Miguel thanks for your presentation today and I like Latin America culture, I have a friend she is a kichwa people from Peru and living in Hakotade Hokkaido, I think most of Latin America people are friendly and interesting. And I like talk with them because it is relaxing. Thank you.

こんにちは、ミゲルさん、今日のパナマの文化紹介ありがとうございます。私は中南米の文化が好きで、多民族と多元文化の国はすごく興味を持っています。私は一人の南米人の友達がいて、ペルーのクチュア人で、今は函館に住んでいます。

私はラテン人は、ほぼすごく親切で面白い人だと思います。彼達と喋るのも好きで、気軽に喋ることができるから。今日はありがとうございました。

¡Hola! Miguel. Lo siento yo no hablo español. ¡Gracias por tu presentacion hoy! Me gusta la culture latina, tengo un amiga de Peru. creo que los Latino americanos son muy ambales, Me musta hablar con ellos. ¡Gracias!

S2: パナマについて観光地ぐらいにしか認識がなかったのですが、祭りの様子や手作りの帽子がとてもオシャレでキレイだと思いました。いつか行ってみたいなと思いました。

S3: Dear Migeru

Thank you for today's presentation!!

I also play the recorder in my elementary school. It's fun!

I was very surprised that you do judo in Panama. I didn't know that Japanese sport spread overseas.

I'm first year student, so I want to enjoy campus life.

Please enjoy your campus life, too.

Minority Ethnic Groups in China 中国の少数民族

中国は大連の協定校から留学中の唐正男（トウ・セイナン）は、工科大学のマイクロ電子工学を専門とする学生だが、まずは56の部族に分かれる中国の人口構成を紹介した。漢族は中国の人口全体の91.64%を占めるがその他の1億500万人の少数民族は残りの約8%を占める。その中から壮族、藏族、回族、そして朝鮮族についてデータや写真、動画を使い、言語、食生活、祭事、衣装、宗教など多種多様な文化の違いについて詳しく述べた。日本ではあまり知られていない中国の少数民族についての発表はELでも初めてのことであったので、質問は学生からも教員からもテキストメッセージおよび音声を使っての両方が出た。聴衆の中にはチベットからの留学生もおり、テキストメッセージで自国についての補足が書き込まれた。

参加者は48名、コメントの返信数は58回で、初級レベルのクラスからは20名が参加した（41.67%）。今回は中国の事情に興味があった教職員の参加が多かったのも特徴として挙げられる。

Let's Travel to the Victoria Falls in Zimbabwe! with Jane ジェーンと一緒にビクトリア滝に行こう

ジンバブエからジェームズやミゲルと同じく教員研修生として留学中のジェーン・ハナニは生物学専攻で、ジンバブエの紹介と最も有名なビクトリア滝について発表した。アフリカの動物たちの紹介とカヤック、バンジージャンプ、ジップライン、ワニとのスイミングなど現地ですることができる活動の数々、珍しい食べ物やレストランなどを写真と共に紹介した。ガイドブックを読むだけでなく直に話ができることは学生にとって興味深かったことと思う。発表としては20分ほど短かったので、質問時間に多くを費やした。

参加者は47名で返信数は24回、初級レベルのクラスからの参加者は30名だった（63.83%）。

Understand South East Asia and its Business Environment 東南アジアのビジネス環境を理解する

シリーズ5回目は、Siew Heng Quah氏が、東南アジアのビジネス事情について講演した。シンガポールでコンサルタント会社を複数経営する傍ら、シンガポール国立大学で非常勤准教授として教鞭をとる氏は、初めに東南アジア各国のシンガポール、マレーシア、タイ、ベトナム、フィリピン、インドネシアを、北アジアの中国、インド、日本、韓国、台湾各国と対照させて、GDP、人口動態、民族、宗教、言語、失業率等のデータを比較分析した。アジアでは、儒教に基礎をおくので、人間関係が、そして個人より社会が優先されること、体面が大事であること、宗教・地方の習慣が影響すること、調和に重きが置かれ、衝突は避けられること、ヒエラルキーが重んじられること、など西欧との比較を行い、さらに東南アジア各国の詳しい事情について言及した。氏は日本において、アメリカ外資系企業での勤務経験があり、西欧型のマネジメント・スタイルを日本の企業経営の中で経験している。今後、すでにグローバル化が進み、日本企業もアジアの只中で経営に携わることが多い昨今であることから、学生からも東南アジアでのビジネス事情について多くの質問が出た。

参加者49名のうち、21名が初級クラスからだったが、内容がビジネスだったこともあり、初級の占める割合は2番目に少なかった（42.86%）。テキストメッセージより直にマイクで聞く質問が多く、投稿として記録されたものは9件のみだったが、アジアで第一とされるシンガポール国立大学MBAビジネススクールで教える氏の講義はユーモアを交えた実際的な理論で主に上級の学生たちの質問とコメントを呼んだ。

終わりにかえて

感染防止が最優先の状況でコミュニケーションを進めることはなかなか難しい。しかし、反対に世界をデジタルでつなぎ、オンラインツールを駆使して国境を簡単に超えることができるというメリットもある。インターナショナル・プレゼンテーションでは映像と音声とメールとチャットを使い、シンガポールと国境を越えてつなぎ、日本在住の留学生には自国の話をしてもらった。パワーポイントなどの映像資料は、むしろ遠隔で鮮明に示すことができるという良い点もある。コミュニケーションの可能性がむしろテクノロジーで大きく発展したのは言うまでもない。

かつてHarmer (2002) は、Eメール交換で効果的に学習する事例をあげ、keypal 同士での文通を組織することを提案している。時代は移り、Mueller & Walzem (2020) は、2 国間でのオンライン・チャットプログラムにおいてチャットが英語上達に役立つだけでなく、文化・知識への興味を促進するのに役立つことを報告している。コミュニケーションへの意欲 (Willingness to Communicate) は、相互のやりとりと刺激において醸成され、それは初級者レベルにおいても、教師により適切なファシリテーションが行われる限り有効に働くのではないだろうか。

これまで感じなくてもよい語学力に対する引け目から、初級者は一歩下がった位置を取りがちだったが、積極的に前に出ていく可能性を先に見ながら、結びとしたい。

これらプレゼンテーション活動を可能にした各国からの発表者の方がたと、参加いただいた EL サポーター、参加者の皆さんに心より感謝申し上げたい。

参考文献

- Berman, S.J., & Tada, M. (2019). Creating a Bridge Between Liberal Arts Classes and the English Lounge Through Active International Lunchtime Projects. *Hirosaki University Journal of Liberal Arts Development and Practices*.3, 67–71.
- Berman, S.J., & Tada, M. (2018a). Multifaceted active learning through lunch hour Japanese food presentations: Procedures, outcomes, and lessons learned. *TELES Journal*. 38,157–166.
- Berman, S.J., & Tada, M. (2018b). A brief account of student investment and reflection in active learning projects presented to multicultural audiences in the English Lounge: “Japanese food our way!” and “This is Japanese cooking!”. *Hirosaki University Journal of Liberal Arts Development and Practices*. 2, 47–60.
- Berman, S.J., & Tada, M. (2018c). Keeping it real: a student-centered cooking project. *Hawaii International Conference on Education 2018 Proceedings*. Retrieved from <http://hiceducation.org/wp-content/uploads/2018/02/EDU2018.pdf>
- Birdsell, B. (2015). Self-access learning centres and the importance of being curious. *Studies in Self-Access Learning Journal*, 6(3), 271–285
- Harmer, J. (2002). 『実践的英語教育の進め方—小学生から一般社会人の指導まで—』. 東京：ピアソン・エデュケーション.
- Mueller, C. M. & Walzem, A. (2020). Is Willingness to Communicate Associated With More Positive Online Chat Experiences?. *JALT Journal*, 42(2).103–120.
- Owen, J.E. (2011). Peer educators in classroom settings: Effective academic partners. *New directions for student services*. 133: 55–64. doi: 10.1002/ss.384
- Tada, M. (2020). Learning by Experience -Connecting Liberal Arts Classes with Language Learning Center. *Hirosaki University Journal of Liberal Arts Development and Practices*. 4, 65–73.